子どもの予防接種

乳幼児がかかる病気で最も多いのが感染症です。生まれたばかりの赤ちゃんには、お母さんからもらった抵抗力（免疫）がありますが、ほとんどが自然に失われていきます。予防接種で免疫をつけて、感染症から子どもたちを守りましょう。

予防接種の目的とは？

予防接種は、細菌やウイルスに対する免疫をつくることで、発症を抑えたり、かかっても症状を軽くしたりします。また、本人だけでなく、周りの人々や次の世代での感染症を防ぐ効果もあります。

ワクチンの種類

予防接種で使うワクチンは２つに分けられます。

●生ワクチン

生きた細菌やウイルスの毒性をほぼゼロにまで弱めたワクチン。ごく軽く感染させたような状態にして免疫をつけます。十分な抗体ができるまでに約１か月ほどかかります。注射のものとスポイトで飲むものがあります。

●不活化ワクチン

細菌やウイルスの毒性をゼロ（不活化）にして、免疫をつけるために必要な成分を取り出して作ったワクチン。十分な抗体をつくるためには、何度か繰り返して接種する必要があります。

定期接種と任意接種

●定期接種：予防接種法に基づき、市町村が行う予防接種で、法律で定められた対象年齢の期間内であれば、原則無料で受けられます。

予防接種名	種類	対象年齢	標準的な接種年齢／回数
*ロタウイルス	生（経口）	１価：生後６週～24週まで	生後６週～15週未満　／２回
		５価：生後６週～32週まで	生後６週～15週未満　／３回
*Ｂ型肝炎	不活化	１歳未満	２か月～９か月未満　／３回
*ヒブ感染症	不活化	２か月～５歳未満	２か月～７か月未満で接種開始　／初回３回、追加１回
*小児肺炎球菌感染症	不活化	２か月～５歳未満	２か月～７か月未満で接種開始　／初回３回、追加１回
四種混合	不活化	２か月～７歳半未満	初回：２か月～１歳未満　／３回
			追加：初回終了後１年～１年半までの間隔をおく　／１回
*五種混合	不活化	２か月～７歳半未満	初回：２か月～１歳未満　／３回
			追加：初回終了後１年～１年半までの間隔をおく　／１回
二種混合（ＤＴ）	不活化	11歳～13歳未満	小学６年生　／１回
*ＢＣＧ	生	１歳未満	５か月～８か月未満　／１回
*麻しん・風しん（ＭＲ混合）	生	１期：１歳～２歳未満	１歳～２歳未満の間で、できるだけ早期に　／１回
		２期：５歳以上７歳未満で小学校就学前の１年間	小学校就学前の１年間（年長児）／１回
*水痘	生	１歳～３歳未満	１歳～３歳未満　／２回
日本脳炎	不活化	１期：６か月～７歳半未満	１期初回：３歳～４歳未満　／２回
			１期追加：４歳～５歳未満（初回終了後１年おいて）／１回
		２期：９歳～13歳未満	小学４年生　／１回
子宮頸がん予防（ＨＰＶ感染症）	不活化	小学６年生～高校１年生（女子）	中学１年生　／２価または４価ワクチンの場合：３回 ※９価ワクチンの場合：15歳以上は３回。15歳未満は１回目接種時の年齢や接種間隔によって接種回数が異なります。

注）・*印がついた予防接種の予診票が封筒に入っています。それ以外は標準的な接種年齢に合わせて交付します。

●任意接種：定期接種以外の予防接種、または定期接種の期間を外れて受ける予防接種です。接種費用は全額自己負担となります。※市では下表の予防接種（１歳以上）に対し、一部助成しています。

主な予防接種名	種類	対象年齢	標準的な接種年齢／回数
おたふくかぜ	生	１歳以上	１歳以降　／１回
インフルエンザ	不活化	生後６か月以上	13歳未満　／毎シーズン２回 13歳以上　／毎シーズン原則１回

予防接種を受ける時の間隔

今回接種した予防接種

今回接種した予防接種		別の種類の
生ワクチン（注射）	４週間（27日）	・生ワクチン（注射）
生ワクチン（注射）	制限なし	・生ワクチン（経口※） ・不活化ワクチン
生ワクチン（経口※）	制限なし	・生ワクチン（注射） ・生ワクチン（経口※） ・不活化ワクチン
不活化ワクチン	制限なし	

（※経口の生ワクチンは、スポイトで飲ませる予防接種です。）

同じ種類の予防接種

同じワクチンを複数回接種する必要がある場合、ワクチンごとに間隔が異なります。
予防接種の説明書をご確認ください。

〔同時接種〕
異なる複数のワクチンを異なる部位に接種します。ワクチンの効果が弱まったり副反応が強まったりすることはありません。なるべく早く免疫をつける方法の一つですが、医師とよく相談しながら決めましょう。

病気をした後に予防接種を受けるときは、
どのくらいの間隔をあければ良いの？

病気になった後は、全身状態が良くなるのを待って予防接種を受けます。一度主治医に診てもらったうえで、いつ受けられるか相談しましょう。

【めやす】

- ●手足口病、突発性発疹、伝染性紅斑、かぜなど ➡ 治ってから１～２週間程度
- ●麻しん ➡ 治ってから４週間程度
- ●風しん、おたふくかぜ、水痘など ➡ 治ってから２～４週間程度
- ●ひきつけ（てんかん） ➡ 最終発作から２～３か月程度

受ける前のチェックポイント

☐ お子さんの体調は普段と変わりありませんか？

予防接種は体調の良いときに受けましょう。

当日のお子さんをよく観察し、明らかに体調が悪い時は接種を見送ります。迷ったときは、医師に相談しましょう。

☐ 予防接種について、必要性や効果、副反応などを理解していますか？

受ける予定の予防接種について、パンフレットや通知をよく読んで、必要性や副反応などについてよく理解しましょう。

☐ 予診票への記入は済ませましたか？

予診票はお子さんを診察して接種する医師への大切な情報です。正確に記入して持っていきましょう。

☐ 脱ぎ着させやすい服装ですか？

接種の際に脱ぎ着させやすい、清潔な衣類を着せましょう。

☐ 持ち物は準備できていますか？

母子健康手帳には予防接種の大切な記録を記入します。忘れずに準備しましょう。

また、予診票や保険証のほか、おむつや飲み物などお出かけセットも用意しましょう。

受けた後の注意事項

●接種後30分くらいは、受けた場所でお子さんの様子を見るなどして、医師とすぐに連絡が取れるようにしましょう。

●接種当日の激しい運動は避けましょう。

●接種部位は清潔に保ちましょう。当日の入浴は体調に変化がなければ差し支えありませんが、接種部位を強くこすらないようにしましょう。

●接種後、生ワクチンでは４週間、不活化ワクチンでは１週間は副反応があらわれないかなど、体調の変化に注意しましょう。

●接種後、接種部位の異常な反応や体調の変化があった場合や、明らかにいつもと違う様子があれば、自己判断せずに医師の診察を受けましょう。

こんな場合は受けられません

○明らかに発熱している（37.5℃以上）

○重い急性の病気にかかっている

○接種を受けようとするワクチンの成分で、アナフィラキシー※を起こしたことがある

○医師が予防接種を行うのが適当でないと判断したとき

※アナフィラキシーとは？

ワクチン接種後、通常30分以内に起こる激しいアレルギー反応のことです。
唇が腫れる、じんましんが出る、顔色が青ざめる、おう吐、息が苦しくなるなど、複数の全身症状が出て、危険な場合ショック状態を伴います。

注意が必要なお子さん

次に当てはまるお子さんについては、予防接種を受けるときに注意が必要です。
主治医や接種する医師によく相談しましょう。

- 心臓病や腎臓病、肝臓病、血液の病気などの基礎疾患がある
- 低出生体重児などで発育障害がある
- 過去にけいれん（ひきつけ）を起こしたことがある
- 過去に免疫不全の診断を受けている
- 接種を受けようとするワクチンの成分で、アレルギーを起こす恐れがある

予防接種と副反応

ワクチンを接種すると、熱が出たり、機嫌が悪くなったり、注射したところがはれたりするなどの症状が出ることがあります。これらの反応のうち、ワクチンとの関係が否定できないものを「副反応」と呼びます。副反応はどのワクチンでも起こる可能性があり、お子さんの体質や体調が影響して症状が出ることもあります。

予防接種後に現れる症状のすべてが副反応とは限りません。たまたま同時期に発生した病気の場合もあります（まぎれこみ反応）。

より安心して予防接種するために、予診票をきちんと記入し、接種前の健康状態を十分確認しておきましょう。また、それぞれのワクチン接種後に起こる可能性のある副反応については、説明書を読んだり、接種前にかかりつけの先生から説明を受けるようにしましょう。

予防接種による健康被害救済制度について

予防接種法による救済

定期の予防接種を受けて起こった健康被害では、予防接種法に基づく健康被害救済制度の給付を受けられる場合があります。

医療を受ける必要（入院を要するレベル）や障害が残るなどの健康被害が起こった場合で、給付を申請するときは、診察した医師、八幡平市福祉部健康こども課へご相談ください。

（独）医薬品医療機器総合機構による救済

任意予防接種や、定期の予防接種であっても定められた期間を外れて接種した場合に起こった健康被害は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構法に基づいて救済されます。

［（独）医薬品医療機器総合機構］

ホームページ▶▶　　電話▶▶０１２０－１４９－９３１

予防接種に関するお問い合わせ先
八幡平市 福祉部　健康子ども課　　TEL：0195-74-2111